

[書評] Claire L. Carlin, *Women Reading Corneille: Feminist Psychocriticisms of Le Cid*, Peter Lang Publishing, Inc., New York, 165P.

著者	伊地智 均
雑誌名	仏語仏文学
巻	29
ページ	69-71
発行年	2002-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017328

書評

Claire L. Carlin, *Women Reading Corneille: Feminist Psychocriticisms of Le Cid*, Peter Lang Publishing, Inc., New York, 165 P.

伊 地 智 均

この一年、学生と『ル・シッド』を読み、その「読み」の可能性を追求した。主人公ロドリグが、愛する人シメヌの父、ゴルマス伯爵ドン・ゴメスを決闘で殺した後、まだ血糊がついている剣を携えてシメヌに会いに彼女の家を訪ねて来るあの有名な場（三幕四場）についてある女子学生は次のように感想を述べている。ロドリグよりシメヌの方が理性的だ。シメヌの父から平手打ちという侮辱を食らわされた己が父の仇を討ってきたロドリグは、シメヌを前にして、「私は死にたい」と感情をあらわにするのに反して、「お帰りになって」と返す。さらに彼が「ああ恋は不思議な力だ！」と言えば、「ああ、なんとみじめきわまりないこと！」と言い返す。そして、ロドリグが立ち去るとき、人に見られないように気をつけてと念を押す、こんな二人を見ると、男性より女性の方がいざというとき、しっかりしていて理性的であり現実的であると言うのである。このように現在すでに、学生たちのものの見方には従来とはまったく異なる男女観が生まれているのである。

さて、この研究書の著者、Claire L. Carlin 女史は、裏表紙の紹介欄によれば、カナダ西部ブリティッシュコロンビア州のビクトリア大学准教授であり、カリフォルニア大学サンタバーバラ校から博士号（Ph. D）を受けている。彼女は序論（Introduction）の中で、フランスのリセの生徒たちが『ル・シッド』を、彼らの文明の模範として示された過去の時代の陳腐な遺物としてあざ笑うのを知って失望した、これらフランスの生徒た

ちにとってはその文明は今やなんら崇敬すべきところはないのだと述懐する。その『ル・シッド』を彼女は教師として研究者としてずっとなん十回も繰り返し読み続けた。なぜ。それはこの作品の中で若いひとりの女シメーヌが、十七世紀フランスの封建的家父長制の世界の中に自己の場をしっかりと見出そうと努めるときの苦しみが、彼女のアメリカやカナダでのアカデミックな世界での人生の難しさと重なったからだ。そんなとき彼女を助けたのは70年代と80年代の欧米のフェミニズム理論で、それが彼女の研究に大きな衝撃を与えてくれたと彼女は言う。したがって彼女ははしがき(Preface)の中でこの著書の目的を、十七世紀フランス演劇のもっとも名高い傑作の一つが「フェミニズムによる精神分析文学批評」(feminist psychoanalytic literary criticism)を用いてりっぱに読まれ得ることを論証することだと断言する。そしてその結果は、作品にも批評理論にも両方に新しい光をあてることになるのである。ところで、彼女は六章にわたって、フェミニズムと精神分析に関する現代の代表的な文学批評理論家の主張を『ル・シッド』の「読み」に適用しているが、ここでは紙数の関係上その一端を紹介するにとどめよう。

女性の行動 (female behavior) について理論分析する Carol Gilligan の見解によれば、「女性の声」(female voice) の役割は、話し手が女性であろうと男性であろうと他人に対する気づかい、介護 (care) の価値体系を増進させることである。それはまた、個人の自己実現のための機会の均等 (equality) よりも、社会の全構成員の相互的ふれ合いをつくる公正 (equity) を促進させるのである。このようにして、シメーヌは女の声としての役割を演じる。たしかにシメーヌはロドリグと一対を形成し、当時の社会的モデル、男性を中心とする貴族社会の名誉の体系に部分的に組み込まれるが、それがゆえになお彼女の運命は悲劇的になるのである。ロドリグは一幕の最終の六場で、恋人シメーヌに義理を立てるか、父親の恩に報いるかの岐路に立って、最終的に後者を選んでからはもはや苦悩はしない。しかし、シメーヌは劇の終りまで苦しみ悩む、たとえば、一年ほど待ってからロドリグと結婚するようにと王から言われても、彼女は返

す。「私は陛下には服従いたさねばなりません。しかし、(…), この悲しい婚礼に果して道理に叶う理由がありましょか、一日のうちにわたしの喪が始まっては明けるというのでは、同じ一日のうちに自分の寝床にロドリグさまを迎え、棺に父を葬るというのでは、陛下、人が私をどう思いましょか。父が殺されたというのにあまりにも物分かりがよすぎるというもの、父の霊にたいしても親不孝な娘ということになり私の名誉はけがされて、いつまでも悪口を浴びましょ。」これはシメーヌの最後の台詞である。彼女はロドリグのようにはっきりと割り切るわけにはいかないのである。男性の論理や価値体系では、一元的な法体系の公平な適用が正義であり、そこでは公平さが強調されるが、女性の倫理に従えば正義は、異常なものを寛容に扱い、ルール破りに例外を設けて救うことを意味するのである。王国にとってはルール破りの敗者ではあるが、シメーヌはその父を心の中から完全に追放することはできなかったのである。

十七世紀の作品を二十世紀の社会科学の学識でもって論評して、はたして正しい客観的な評価を得ることができるのであろうかという疑問には、著者はこう答えている。文学的作品はすべてテキストであって、それは未完成なものと考えてよい。読者がそこに参加して作品を完全なものにするのだ。したがって現代のあらゆる知識、感性をもつ読者が読書することにより過去の作品は完全なものになるのであると。

最後に、この本の末尾に付けられている参考文献リストはたいへん有用なものであると言っておこう。コルネイユ研究についての文献は言うまでもなく、フェミニズムや精神分析批評に関する文献はすべて重要なものが網羅されていて、今後この種の研究をする人には大いに参考になるだろう。

(本学教授)